HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会第３回大会シンポジウム記録 食行動からみる文化 ： パプアニューギニア・クボとトンガ王国の事例から
著者	須田，一弘; SUDA，Kazuhiro
引用	北海学園大学人文論集(61)：73-97
発行日	2016-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

食行動からみる文化：
パプアニューギニア・クボとトンガ王国の事例から

須　田　一　弘

１．はじめに

私は，「文化の諸相」のうち，食行動または食文化は，他の文化要素とどのような関連があるのかについてお話したいと思います。具体的には，これまでの調査地から対照的な２集団を取り上げ，ブタ食を中心にカニバリズム，犬食も視野に入れながら，それぞれの集団の文化全体との関連について考えたいと思います。ここで取り上げる集団は，オセアニアという地域に含まれるパプアニューギニアのクボ語を話す集団と，トンガ王国のハ’アノ島の事例です。二つの集団の詳細につきましては，須田（2002）と須田（2006）をそれぞれご参照ください。

２．クボのカニバリズムとブタ食

クボは，パプアニューギニア西部州の大パプア台地のノマド地域に暮らしています。標高は100～200ｍで熱帯林に囲まれています。1961年に植民地政府の出張所が設立されてから，外部との接触が本格的に始まりました。それまでは，数家族からなるグループがロングハウスで半遊動的な生活を送り，グループのメンバー構成も離合集散により変動していました。ロングハウス間では襲撃や戦闘が横行する一方，婚姻や成年儀礼，戦闘同盟などでいくつかのロングハウスと友好的な関係を結んでいました。

彼らの生業はサゴヤシからのデンプン抽出，移動式農耕，狩猟・採集・漁撈による野生動物の利用，ブタやヒクイドリなどの家畜飼養です。陸上

性の有胎盤類が生息していないニューギニア島で，クボの貴重なタンパク源となる動物性食物は，周囲の熱帯林に生息する野生の有袋類，鳥類，爬虫類と，かつて人間が持ち込んだブタが野生化したノブタが中心です。(写真１)

食物摂取にはそれほど貢献していないと思われる家畜飼養については，私が初めて調査を行った 1988 年には，ブタ食を禁じるセブンスディ・アドベンティスト派への改宗が進み，ブタ飼養は行われていませんでした。しかし，1980 年代半ばまでは，ニューギニアの他の集団と同じく，家畜飼養の中心はブタでした。ブタの世話はおもに女性が行なっていました。授乳中の女性は，小さな飼いブタを赤ん坊と一緒に紐のバッグに入れて運び，赤ん坊とブタの両方に授乳していたといいます。こうして育てたブタはいわば家族の一員であり，自分たちで食べることはけっしてありませんでした。

さて，ニューギニアにはカニバリズム，いわゆる食人の慣行で知られている集団があります。カニバリズムには，東部高地州のフォレのように，葬送儀礼において亡くなった身内の思い出とともにその死体を食べるエンドカニバリズムと，敵を殺して食べるエグゾカニバリズムの二つがありま

写真１．弓矢で仕留めたノブタ

す。前者はプリオンの感染源として注目されてきましたが(クリッツマン，2003)，クボでは1980年頃まで，後者のエグゾカニバリズムが行なわれていました。クボではすべての人の死は邪術によると考えられており，誰かが死ぬとその犯人とされる邪術師が特定されます。その後，その邪術師は死者の家族に殺され，その死体は殺人の協力者に食料として提供されました。

このような食人が行なわれるいっぽうで，自分が飼っているブタを食べることはありません。儀礼などでブタを食べる必要がある時は，自分が飼っているブタを，他者のブタと交換して利用していました。この規則は，現在飼養しているヒクイドリにも適用されており，儀礼の主催者は，自分が飼っているヒクイドリを他者のそれと交換してから食べています。儀礼には交換によりヒクイドリを提供した家族も呼ばれますが，彼らは決して食べることはありません。このような極端な食行動は，文化の他の側面にもかかわっていると思われます。

3．トンガのブタ食と犬食

ポリネシア西部のトンガ諸島には，今から約3,000年前に人が移住してきたと考えられています。その時に，食用としてのブタとニワトリ，さらにはおそらく狩猟の補助としてイヌを連れてきました。陸上動物相の貧弱なトンガでは，狩猟対象となる動物がいないため，現在ではイヌは番犬として，また，時に食用として飼われています。西洋との接触以降はウマやヤギ等も導入されました。ウマは輸送用としても利用されていますが，時には食用にもなります。

私が調査をしたハ’アノ島は，トンガ王国の中央に位置するハ’アパイ諸島に属しているサンゴ礁に囲まれた小さな島です。島内に現金収入源となる産業はほとんどなく，人々はバナナやタロイモなどの農耕，漁撈，ブタなどの家畜飼養，国外への出稼ぎや外国に住む家族からの送金に頼って暮らしています。野生の陸上性動物がいない島国のトンガでは，日々の食料は，

自分の畑で育てたタロイモ，ヤムイモや料理用のバナナに，魚や貝類，エビやタコなどの海産物の組合せが中心です。

ここで，クボと同じく家畜飼養についてみていきます。ハ’アノでのブタの役割は，婚姻の際の婚資や葬儀などの儀礼における交換財として重要な意味を持っています。また，急な出費がある場合には，飼っているブタを販売して現金に換えることもよくあります。食料としても，儀礼時のご馳走として，ブタの丸焼きはかかせません。ブタは，日中は村の中で放し飼いにされていますが，夕方になると敷地内の囲いの中に誘導され，ココナツミルクの搾りかすや残飯などが餌として与えられます。さて，ブタを料理しようという場合，トンガではもっぱら自分の飼っているブタを屠畜します。囲いの中にいる朝のうちにその日に食べるブタに目星をつけ，囲いの隅に追い込んでナタなどで撲殺し，手早く解体します。自分の飼っているブタを屠畜することにためらいはみられません。(写真 2)

これは，イヌの場合も同様です。2001 年に調査のため居候していた家では，番犬としてイヌを一匹飼っていました。我々にもなついて，他家のイヌが我々に吠えかかると，敷地から出て他家のイヌを追っ払ってくれる頼もしい存在でした。ところが，翌年に行ってみると姿が見えません。どう

写真 2 ．さっきまで逃げ回っていた仔ブタを丸焼きに

したのかを居候先の子どもに尋ねると，他家の飼いブタに噛みついて殺してしまったので，怒った父親が殺してしまったということでした。殺した後はどうしたのか，再び尋ねると，蒸し焼きにして家族で食べてしまったということでした。食料として飼育しているブタを自分で屠畜して食べることにはそれほど違和感を持たなかった我々も，番犬として飼っていたイヌを家族で食べてしまったという話には驚かされましたが，トンガの人々にしてみると，当たり前のことなのかもしれません。

４．クボとトンガの比較

クボとトンガでは，同じようにブタの飼養をしていながら，その食行動は対照的です。クボでは，自分の飼っているブタは絶対に食べません。どうしてもブタを食べなければならない場合は，自分が飼っているブタと他者が飼っているブタを交換して，他者のブタを食べていました。そのいっぽうで，敵や邪術師であれば，人間を食べることも辞さないのです。これに対し，トンガでは交換財としても重要な自分の飼っているブタを躊躇なく屠畜し，食べています。場合によっては，番犬として飼っているイヌまでも食べてしまいます。

こうした違いは,彼らの文化の他の側面とも関連していると思われます。クボを含めたニューギニアの諸集団は，他者との差異を強調する少人数のグループで生活していることが多いのです。他集団との関係はいつも緊張関係を帯びたものとなり，知らない者どうしが出会った場合には，戦闘にエスカレートすることもあります(ダイアモンド，2013)。とくに，言語においてその特徴は際立っています。パプアニューギニアの公用語のひとつであるピジン語では，同じ言葉を話す人をワントークと呼び，ワントークであれば無条件で助け合わなければならないという規範があります。たとえ犯罪者であっても，ワントークメンバーから助けを求められたら，できる限りのことをして相手をかばうことが求められます。そして，ワントークの範囲は状況によって伸び縮みします。

さらに，クボの社会では，資源や女性をめぐる葛藤により，ロングハウスの内外で緊張関係が継起し続けています。そして，緊張関係は誰かの死によって顕在化し，その死をもたらした邪術師が特定され，殺害されるのです（須田，2002)。こうした状況の中では，ウチとソトの境界を重視し，ウチにあるものには家族同様に接し，ソトにあるものには敵として対処するという，求心的で内向きの傾向が顕著になるでしょう。

これとは対照的に，トンガの食行動は彼らの遠心性，または外向きの傾向が表れたものとみなすことができます。トンガ諸島の祖先であるポリネシア人は，現在の東南アジアから，ニューギニア島を通り，今から約 3,000 年前にトンガやサモアに到着しました。その後，比較的短期間に生活の場を拡散し，ハワイとイースター島，ニュージーランドを結ぶほぼ正三角形の海域に散らばる島々に移住して行きました(印東，2013)。こうした傾向は現在でも続いていると思われます。現在，トンガ王国の人口はおよそ 10 万人ですが，それとほぼ同数またはそれ以上のトンガ人が，ニュージーランドやオーストラリア，あるいはアメリカに移住しています。どの家族を見ても，そのメンバーの誰かは海外で生活しているのです。そして，海外に住む家族からの送金は，トンガ王国に住む家族の重要な収入源になっています（須田・口蔵，2003)。つまり，トンガではウチとソトの境界があいまいであり，外向きの傾向があるとみなすことができます。

5．おわりに

これまで述べてきた食行動と他の文化の側面との関係をまとめると，次のようになります。クボにおいては，動物性食物は熱帯林に生息する有袋類，鳥類，ノブタ，爬虫類が主であり，それらはソトの世界に位置づけられます。そして，ソトにあるものは野生動物であれ，家畜であれ，人間であれ，食べてもよいものとなります。いっぽうで，ウチにある人間や家畜は，当該家族にとっては境界の中にあるものであり，食べることはできません。トンガでは，陸生の食用野生動物はほどんど存在せず，動物性食物

は海産資源が中心になります。陸上性の哺乳類はすべて人間が持ち込んだものであり，当初の用途は別にせよ，すべて食用となる可能性を持っています。みずからが飼育している動物への愛情は，ウチとソトの境界のあいまい性の中で意味を持たなくなったと考えることができます。

これまでに何度か調査を行ったパプアニューギニアのクボとトンガでの対照的な食行動をもとに，それぞれの文化の他の側面との関連を考えてみました。かつては食人を行っていたクボが，自分の飼っているブタやヒクイドリをけっして食べないという極端な行動と，自分の飼っているブタどころかイヌまで食べてしまうトンガのこれも極端な行動を，なんとか同じ土俵で解釈できないか，というのが本発表のきっかけです。うまくまとめることができたかどうかは自信がありませんが，多様な解釈の一つとしてお聞きいただければ幸いです。クボとトンガの両極端な食行動というのも，もちろん私の独りよがりの解釈に過ぎないことを付言しておきます。

引用文献

印東道子（2013）
「海域世界への移動戦略」印東道子編『人類の移動誌』臨川書店：232-245
ロバート・クリッツマン（2003，原書は 1998）
『震える山：クールー，食人，狂牛病』法政大学出版局，榎本真理子訳
須田一弘（2002）
「平準化をもたらすクボの邪術と交換」大塚柳太郎編『ニューギニア　錯綜する伝統と近代』京都大学出版会：87-126
須田一弘（2006）
「サンゴ礁の人と魚」印東道子編『環境と資源利用の人類学』明石書店：37-59
須田一弘・口蔵幸雄（2003）
「トンガ王国ハアノ島ハアノ村の漁撈活動」『北海学園大学人文論集』第 23・24 合併号：349-374

全体討論

○司会　それでは，ただいまより全体討論を行いたいと思います。

最初に申し上げておきたいと思うのですけれども，本日のメインテーマは「文化の諸相」ということです。最初に申し上げましたように，4 人の先生方は,それぞれ異なった専門分野を専門としている先生方であります。ですから，当然それぞれが自分の専門分野から発題をされたわけですが，共通のテーマは文化の諸相でありますから，このことをよくしっかりと踏まえていただいて，これからの全体討論をしたいと思います。

最初に，それぞれの 4 人の先生の中で，お互いの発題に対して何か聞きたいことがあれば,それを最初に 4 人のパネリストの間の相互の質疑応答，これに少し時間を割きまして，その後，質問用紙にお書きいただいた方の質問を取り上げたいと思います。その後，その全体討議の中でさらにいろいろとまた疑問も出てこようかと思いますので，フロアのほうから挙手をいただいて質問をしていただくと，そういう手順でいきたいと思います。まず，4 人の先生方の相互間で，お互いに相談せずに「文化の諸相」というテーマで考えてきたことを発表してきたけれども，他の 3 人の先生の発表を聞いてみて，少し考え直したとか，あるいは，どなたかの発表に関してこの点を聞いてみたいということがあったら,お願いしたいと思います。

まず，上野先生から，ほかの方に，もしありましたら。

○上野氏　ほかの分野で，なかなかわからないところがあるのですけれども，ちょっと聞いていて，例えば，まず，では佐藤先生，ちょっと御発表の内容とは違うかもしれないですけれども，宗教ということで，キリスト教とかイスラム教，仏教とか，いろいろな宗教がありますので，そういう宗教の違いというのがあるわけですけれども，自分の話にちょっと引きつけて考えると，もとは，人間が自分の生と死というものを考えるというところから宗教というのが出てくるのかなというふうに思うのです。けれどもそのときに，普遍的なところと，それから表面上の違いが，現代のそういういろいろな宗教になっているのではないかという，そういうふうに考

えられないのかどうかという点，もし何かお考えがありましたら教えていただければと思います。

○佐藤氏　生と死というものが宗教の起源かどうかというのは，これもいろいろ議論があると思うのですけれども，でも，それは，我々，この中で一人も死なない人はいませんから，みんな死にますから，我々は，そういう意味では，人間の古代からずっと普遍的なものだと考えたときに，死後，自分はどうなるのだろうと。死後，自分がどうなるかというその考え方は，必ず生を規定しますから，そういう意味では普遍的な要素というふうに言ってもいいのではないかと思うのです。ただ，それを今度，具体的な現象として出てきたときに，地域文化みたいな，あるいは，そういう特殊な文化というのがあるのかというふうに理解をしてもいいのではないかと思うのですけれども，それは私も，具体的にこうだ，こうだというふうに類型論的に言えませんけれども，やっぱりユダヤ教なんかが出てきたときにですね，砂漠から出てくるわけです，非常に過酷な砂漠から出てくるわけですよね。あるいは，イスラム教もそうだと思うのですね。ああいう非常に過酷な砂漠から出てきたときに，神観というのは，これはウェーバーも似たようなことを言ってますが，非常に厳しいものになると。ところが，アジアの，あまり過酷でないところから出てくると，神観が変わってくるというので，神観の違いとして，その生と死というのは，それは人間として普遍的なものかもしれないけれども，神観の相違において，そこの地域性とかというものが特殊性としてあらわれてくると，これはウェーバーが言っていることですけれども，そういうふうに言えませんか。

○司会　それでは，佐藤先生のほうは，何かありましたか。

○佐藤氏　私，言語学のことを聞きたいのですけれども，言語学の本，いつも読んでも，いつも途中で嫌になってやめてしまうのです。これは言語学の問題ですが，恐らく全ての学問，つまり，言葉を変えると，全ての学問に関係すると思うのですが，言語学の中でどう考えているかという話を聞きたいです。このレジュメだと10ページですけれども，ソシュールの話が出てきますよね。私，ソシュール，何回読んでもよくわからないのです。

いわゆるソシュールというのは，構造主義というか，言語論的見解を用意した思想家だと思うのですよね。私が非常に雑駁に考えた後，存在するものと，それに付与された意味と，それを名づける言葉というか，名前というのですかね，そこにおいて，言葉によって必ず差異があるわけですよね。これを徹底的に問い詰めていくと，我々，一切理解できなくなるということが起こり得るのだと思うのですね。それが言語論的転回としてさまざまな学問に影響を与えたときに，例えば歴史学だったら，我々は本当に歴史のことを理解できるのかという，つまり，言語において必ず差異があって，ある一つの言葉が，ある言語においては必ず同じ領域をあらわしているわけではないというふうに考えたら，例えば外国なんかの研究者は絶対理解できなくなってしまうわけですよね。そういうソシュールから出てくるのが言語論的転回で，言語学の中でどういうふうに考えるかというのをちょっと教えていただきたいのですよね。これは恐らく，大前提として一つ議論になるのだと思うのですけれども。

○上野氏　ちょっと難しくて答えにくいですけれども，恣意的に，人間は世界を範疇化していくというわけで，それが極端なところまで行くと，お互いに全くコミュニケーションがとれないということになるわけですね。ただ，言語の場合は，そういう場合，手っ取り早く借用してくるというようなこともありますから，何とかできるのですよね。要するに，アフリカの何とかという，原子力とかそういうこととは全く縁のない世界の人たちの言葉であっても，今の段階では，そういう原子力とか何とかという話はできないかもしれませんけれども，必要なものを，例えば借用してくるなり，あるいは，自分の持っている手持ちの言語をいろいろ組み合わせを変えるというようなことをやると，また新しい概念を話すことができるということになるので，全く翻訳不可能ということには多分ならないのだろうというふうに思います。

○司会　郡司先生，どうですか。

○郡司氏　特にないですが，今の部分にちょっと関連して，一つだけ補足を自分のことについてしておくと，片柳は，文明も文化も，そういう用語

は一切使ってません。

○司会　須田先生，どうぞ。

○須田氏　実は，郡司先生の，中国の人を土人という呼び方をするというのがあって，オセアニアでは，きょうはお話ししていませんけれども，ミクロネシアの人たちに対して，専らですね，土人，南洋土人というような言い方をして，オセアニアの人たちは表象されていたということがあったので，そのことを，実はもう，さっき，タバコを外で吸っているときに郡司先生に聞いてしまって，答えていただいたので，特にあれなのですが，もう１点，佐藤先生にちょっとお伺いしたいというか，きょう，私のところでは全く宗教には触れませんでしたけれども，オセアニアの地域というのは，ほぼ99％がキリスト教徒ということになっています。ニューギニアの場合は村ごとに，ある宗派に入るよう，それから，トンガの場合には，村に四つ，五つぐらいの宗派があって，それぞれに入っているのですね。特にトンガの場合は，毎週必ず日曜日にはお祈りに行く，それで，その日は働いてはいけない，日曜日は安息の日であって，働くと，実は刑法に違反して捕まってしまって牢屋に入れられるなんていうことがあるのですよ。こうしたオセアニアの，極めて新しいというか，キリスト教が入ってきて，それを，言ってみれば大綱的に取り入れているというふうに言えるのかもしれませんけれども，そうした状況というのは，きょうのお話の，近代的，あるいは再帰的近代と宗教というお話とどのようにつながるというか，そういう言葉も包含しながら，いわゆる現代のキリスト教，あるいは宗教というようなことを考えるということは可能なのかどうか，何とも答えようのないような質問かもしれませんけれども。きょうのお話というのは，ヨーロッパ社会のお話だったわけですよね。

○佐藤氏　そうです。恐らく今のお話は，この再帰的近代化とか反省的近代化の話より，恐らく，すごく伝統的な概念ですけれども，土着化という概念で考えたほうがわかりやすいのではないかと。わざわざ，このややこしい近代化の議論をするよりですね。私がきょう話したのは，レジュメで飛ばしましたけれども，複数ある近代化に関する複数ある理解の一つです。

近代化も複数あって，先生が行かれている地域が，近代化しているかどうかはわかりませんけれども，私が取り上げたのは複数ある近代化に関する複数ある理解の一つで，それは本当にヨーロッパだし，もっと言えばドイツ周辺ですか。そう考えたときに，私の議論で，先生のきょうの御発表の，あるいはキリスト教の話ですか，それを解釈するというのは，ちょっと今すぐは思いつかないけれども，ただ，土着のほうがいいのではないかなと。どっちでしたかね，キリスト教原理主義という話をされましたね，セブンスデー・アドベンティストでしたっけ，あれは原理主義なのか，私の知り合いにこれに入っている人がいるのですが，あれは土曜日に礼拝するのですよね。どうなのでしょうね。

○須田氏　それは旧約聖書の，全て準拠するということ。

○佐藤氏　食べないものもありますよね。それでキリスト教ではない，基本的にないものなのですよね。ただ，そう考えたときに，恐らく，もうちょっと単純に土着化という概念で考えたら，もっとわかりやすくなるような気がしますね。もうちょっと，つまり，先生が言っている地域の近代化の議論がわからないと，私，何とも，材料がないということです。

○司会　それでは，続きまして，質問用紙に質問いただきました 4 人の方から質問が出ておりますので，直接御本人から質問をしていただくのが一番いいかなと思いますので，まず，岡野先生。

○岡野氏　質問というのではなくて，私は護憲運動をやっているもので，憲法のことに非常に関心があるので，憲法 13 条の個人として尊重されるというところの個人が重要だと，そして，今の若い人たちが活動するときに，まことにその個人として立派な活動をしているということに感銘を受けているわけです。そんなこともあるのかなと思うのですけれども，個人化ということを佐藤先生がおっしゃった，これはやはり，プロテスタンティズムが起こってくる中で，教会という組織の形がだんだんと，ある場合，宗教改革の中で，変わっていくというか，崩れるというか，そういうことと関連があるのでしょうね。そして，そういうことがあるということと，今の世の中でもそういうことが起こっているのだろうと思うのですけれど

も，それとは全く別に，仏教の，ブッダが，お釈迦様が語られたことばが，『スッタニパータ』と言うのですか，中村元さんが翻訳されたものが岩波文庫にあって，それ，たまたま私が開いてみたところにあったのを思い出して，ちょっと佐藤先生に聞いてみようと。個人化という，その個人というのは，もう既に仏陀にはあったのではないかということが私の中にちょっとありましてね，それで，それはどうしてそう思ったかというと，『スッタニパータ』の中にある言葉で「犀の角のごとく歩め」という，そういう文句があるのですね。それでもって，私は，はっと思ったのです。そういうことについて，佐藤先生，感想を述べていただければと思います。

○佐藤氏　そういうことに私は余り詳しくないので，何とも答えようがないのですが，ただ，ちょっと思いついたことと，「犀の角のように歩め」というのが，その「角」というのが個人化の原形にというか，表象というか。それで，さっき，アイトル先生からも，質問用紙には出ていませんけれども，アウグスティヌスはどうだという話が出て，実はベックは，アウグスティヌスとデカルトとルターが個人化の原理において非常に重要な役割をしたと。時代は大分，古代末期ですから後ろになりますけれども，さらに，さっき，アイトル先生は，要するに，アウグスティヌスという『告白』という自伝ですかね，大変有名な本で，美しい本ですけれども，その中で，私というものが，リフレクション，要するに，反省されているのではないかというですね，そういう議論があったのですよね。これ，要するに，私の発表がちょっと雑駁なので，個人化をどう捉えるかということで，それは古代にも個人化があったかもしれないし，初めてプロテスタントで個人化が出たかもしれないし，アウグスティヌスで個人化が出たかもしれないというふうに考えたときに，これはちょっと簡単ではないのですが，あるいは古代ギリシャだって，叙事詩から叙情詩の変化とかに個人化，私の観念を見る研究は恐らくあると思うのですよね。そう考えたときに，個人化をどうやるかというときに，一つは，ちょっとルターに引きつけて考えて，これが釈迦に対応するかどうかはわかりませんけれども，ちょっと私の，話せばですね，私の博士課程のときの指導教授はルターとアウグスティヌ

スの専門家だったのですよ。専門家，恐らく先生は僕に言われると嫌がるかもしれないですけれども，専門家というよりも権威と言ってもいいと思います，ルターで学士院賞を取っている先生ですから権威です。私も，だから，大学院に行ってアウグスティヌスとルターの話をよく聞いたのですが，そのときに先生が言っていたのは，ルターの場合は良心という概念だと。アウグスティヌスの場合は心という，cor（コール）と言いますかね，ラテン語で，その観念がやっぱり人間の私というものを意識させるときに非常に重要な意味を持っているのだと。もちろん，心も良心も神との関係において成り立つ概念ですけれども，そういうものが，アジアでもいいし，インドネシアとかにあるのかないのか，あるいは，全く違う原理で個人化というものがあるのかどうかというのは，ちょっと何とも言えないのですが，ちょっと西洋の話に引きつけて言えば，ちょっと今，そういうことを思い出したというぐらいで，申しわけないです。

○岡野氏　わかりました。その違いというのは，やっぱり重要なことだと思いましたね。今，お話伺って。釈迦はどのぐらいそういう観念を持っていたかということは，そこではわからないわけです，私が勝手なことを思っただけの話ですので，済みません，ありがとうございました。

○司会　それでは，続きまして，大谷先生，お二人の先生にですね，上野先生と郡司先生に御質問があるようですので，大谷先生，お願いします。

○大谷氏　上野先生のほうから，どうも御発表ありがとうございます。示されたさまざまな問題，一番，私，切迫して感じるものばかりだったのですけれども，一番最初から始まる認識と言語の対応ですけれども，これ，認識というのをどうとるかによって関係がちょっと異なってくることがあるのではないかと思ったものですから，先生がどういうふうに捉えているのか教えていただきたいなと思いまして。

○上野氏　実は，一番嫌な質問ということで，本当はその辺触れたくなくて，オブラートで包んだ，柔らかく考えてしかいないのですけれども，要するに，認識ということで，人間がある現象を見たときに，どういうふうに捉えていくかということだと思うのですね。その一つとしては，例えば，

よく言われる話なのですけれども，大きな木の横に自転車が置かれているというときに，大きな木の横に自転車が置かれているのか，あるいはその自転車の横に大きな木があるのか，これはちょっと微妙かもしれませんね。自転車ではなくて，例えばアリがいるとかという話でいくと，大きな木の横にアリがいるのか，アリの横に大きな木があるのかという，そういうときに，普通，大きな木を基準にして捉えると，そういう捉え方というふうに考えています。

○大谷氏　わかりました。それ以前に，まず，アリだとか，大きいとか，そういった概念を認知するという，明るい，暗いとか，こういったものの段階からどう捉えるか。つまり，言語前認識と言語後認識ということがあるだろうと思うのですけれども，今，ちょっと複雑なところまで持っていかれたのですが，これが一緒くたになると，結局，どの論をとるかということになって，私たち認識のレベルによって，その言語が関与するのは相当違うのではないかなと思うのですけれども，いかがですか。

○上野氏　そうですね，確かに，言語というのは，人間の認識を言語表現に変えたという部分があるので，その言語の認識がどういう捉え方をするかというのは，言語，そうですね，微妙にいろいろかかわってくるかもしれないですね。例えば，先生，具体的に何か，こういう場がどうかというような話はございますか，逆質問ですけれども。

○大谷氏　私は特に論があってではなくて，例えば，配布資料の一番最初のスクリーンショット②「言語と認識」になりますかね，こうした，全くその言語と認識とが別々に存在するもの，どちらかに従属的になる，どちらかが支配的になるというもの，等々の理論があるということですけれども，これは認識をどう捉えるかによって，私たちの認識のレベルによって，それぞれの関係が違うのではないかと思うのですよね。ですから，先に，アプリオリに何らかの概念があるということはあるのではないかと，まず明るい，暗い，これは太古のときからですね，明るい，暗いだったり，暖かい，寒いがあるのかもしれないのですね。これは何とも言いようがないのですけれども，その後，言語習得した後生まれる概念があって，これは

先ほどの，例えば原爆のない世界で原爆をどういう認識をするかという話になりますから，言語が存在してから初めて生まれる概念だと思うのですよね。それはまず概念の話で，最初の認知という段階のレベルと，それから，あとは，どこに何があるだとか，何がどんなだとか，それも「明るい」と「美しい」は全然違うと思うのですね，そういうことを聞きたかったのですよね。

○上野氏　それはよくわかりませんけれども，生成文法なんかでも普遍文法という，生まれながらにして生得的に言葉のもとみたいなものを持って我々は生まれてくるなんていう考え方をするのですけれども，その中に，暗いとか明るいとかというのも，多分，全ての人間に共通するものだと思いますので，それはもう生得的に我々に備わっているのではないかというふうに思いますけれども。

○大谷氏　どうもありがとうございます。では，郡司先生にお尋ねいたします。郡司先生，どうもありがとうございます。これは，ちょっと何か単純な問いなのですけれども，書かれている書簡について興味深い内容が非常に盛られているので気になったのが，軍の内部での検閲についてです。日清戦争のころの，そういう検閲というのはどの程度のものだったのか教えていただきたいなと思ったのです。

○郡司氏　検閲の実態については余り詳しくない，ただ，戦争の後になれば後になるほど，要するに，戦争が，戦場の，日本における軍隊の組織の存続だけでは決しないという，そういう考え方が一般的になっていくので，後になれば後になるほど検閲が厳しくなっていく。ただし，これはかなり地域でも違うのと，それから，どうも本人に送られてくる書簡に関しては，戦争の末期までも検閲はされていないようなのですね。お答えにちょっとなっていないので，勉強して後日お答えしたいと思いますが，ただし，片柳自身は，軍規に触れるので，これについては書けないというようなことも書簡で書いています。ですから，ある程度そういったことが意識されていたことは間違いないと思いますが，ただし，内容を見る限り，検閲があったとは少なくとも思えないというか，片柳に関しては。どうも不確かなお

答えなので，後日，調べてお答えしたいと思います。なお，いわゆる軍事郵便の制度が始まるのは，この戦争からです。要するに，無料で。

○大谷氏　ありがとうございます。

○司会　それでは，次に，本城先生から上野先生に対する質問です。

○本城氏　人文学部の本城と言います。上野先生のスライドの５枚目，レジュメで２枚目の左側のほうの説明について，ちょっと質問というか意見なのですけれども，たまたまここに見えている岡野先生に，北大時代，英語学を習ったのですけれども，今は憲法のほうの，憲法を守る……。

○岡野氏　日常生活の中で。

○本城氏　「Empty gasoline drums」のところの，作業員をあざむいたのは英語ではなく彼自身の目だという，この説明に対して，僕は，作業員が使っている empty が含まれる言語世界ですね，英語の世界の認識の限界が，この作業員の間違いを引き起こしたのではないかというふうに考えたのですね。ただ，上野先生は，同時に，その言語と認識というのは，どちらに固定的に依存しているのではなくて，相互関係にもあるというふうにも前のほうでおっしゃっているので，僕は，この説明に対する，反対ではないのですけれども，そういう，英語という言語の認識の限界がこの作業員の間違いを導いたのだというような，そういう説明の仕方でも成立するかどうか，ちょっとお聞きしたいと思いました。

○上野氏　まず，英語のせいで作業員が危険がないというふうに判断したというのが，さっき，僕の考え方ということになりますよね。それに対して，見た目，その空っぽのガソリンの缶というのは，同じに見えるわけですから，それを認識することができなかったということになりますよね。その認識したのは，目ということなので，そこには一応，彼自身の目が原因でそういう事故になったのだということを言ったわけですけれども，その作業員の目が，要するに，本当に何も入っていない空っぽのドラム缶というものと，それから，気化した状態のガソリンが充満しているのだけれども，見た目には見えないガソリンのドラム缶というものが，端から見ると同じに見えてしまうので，それを認識することができなかったという意

味では，認識の限界ということになるのではないでしょうか。

○本城氏　わかりました。多分，大谷先生が言っている認識のレベルの話にきっとつながると思うのですね。英語の言語世界の認識の話と，個々の英語使用者の認識，ちょっとまたそこも厳密に言えば違うような気もしますが，上野先生，わかりますか。

○上野氏　その辺ちょっと私はよくわかりませんので，整理できていませんから，ちょっと考えてみたいと思います。

○司会　ありがとうございました。それでは，次に，これは 4 人のパネリストの全ての方にかかわる，かなり本質的な問いなのですけれども，大石先生のほうから，こういう質問が来ておりますので。

○大石氏　本質的な問いというよりも大ざっぱな問いなのですけれども，それぞれのパネリストの方に，どのような文化概念を前提にそれぞれの方々がお話しなさったのかということについてお伺いしたいと思います。きょう，まさしく文化の諸相ということで，さまざまなお話をお聞きしたのですけれども，やはり文化ということで何かしら共通性はあるのでしょうが，それぞれの先生の考えていらっしゃる文化という概念について，何か，やっぱり多様なものを感じたのですね。上野先生は，先ほどから問題になっている，認識と対立する，対立はしないのもしれないのですけれども，それとまた異なるものとしての言語という，認識のほうですよね，文化から，言語との関係で捉えられるような文化でありましたし，特に郡司先生の場合は，異文化という形で，しかもそれが戦争という究極的な，人間の極限状態で出会われた文化についてのお話でありましたし，文化の差異を，郡司先生のお話では，異文化と出会われるところで文化の差異の問題になっていたでしょうけれども，須田先生のところでも，やはり文化の差異というのが問題になってきて，その差異が，いわゆる文化ということも関係してくるのだろうと思うのですけれども，それぞれの先生がどういう文化概念というのを前提にお話しなさったのかということについてお伺いしたい。もちろん一言で答えられるような問題でもなかろうし，大ざっぱな問いでもありますけれども，質問が少ないということで，そういう質

問をさせていただきます。

○司会　それでは，上野先生からお願いします。

○上野氏　一番最初にも言ったように，一応，英米文化に属してはいるのですけれども，文化というところからはちょっと遠いところでいろいろ考えているものですから，文化とは何かというようなことを言われても，なかなか答えられません。ちょっと余計なことを話して時間を潰すとですね，公募推薦のときに郡司先生と一緒になって面接をしたことがあるのですけれども，学生に文化とは何かと辞書を引いたことがあるかという問いがあって，私は冷や汗をかいて聞いていたのを思い出しました。その後，辞書を引いたりもしたのですけれども，結局，何か，よくわからないというか，要は，人間が生きていて，そこから生み出されるもろもろのものというくらいのことしか考えていませんで，それが言語というものにどう影響を与えるのか，あるいは，その文化が言語に影響を与えているのかということを，きょうは考えてきたわけですけれども，文化とはどういうものかというのはなかなか難しくて，ストレートにはお答えできないというのが正直なところです。

○佐藤氏　このシンポジウムの一番最初は，「文化とは何か」というテーマだったのですよ。私の隣にいる郡司先生からそうやって言われて，文化とは何かをやるのだと，なぜなら，ここにいる４人は何も共通していないから，それぐらいしかないのだというふうに言われたのですよね。みんなが集まったときに，急に「文化の諸相」になったのですよね。ただ，文化とは何かという問いが，私は，どうなのかなというのはちょっとあるのですね。文化の問題というのは，定義してから問うものなのかなと。あと，もう一つ思い出したのは，会議をしたときに，須田先生が，文化とは文化人類学ではもう決まっているのだと言って，すらすらと，そらで言ったのですよ，文化の定義を。それで，ああ，なるほどなとは思ったのですけれども，やっぱり文化を考えるときに，文化の定義をしてから文化を考えるというのは，どうなのかなと。これだけ混ざってしまった時代に，そういうことが本当に成り立つのか。変な話，推考的に文化を定義というか，文化

を考えていくという，走りながら考えるみたいなですね，そっちのほうが恐らく合っているのではないのかなというのが私の感覚なのですよね。それでも何か定義しろと言われたら，私は，自然でないものとしか定義できないと思います。

○郡司氏　先ほどもちょっと話をしましたが，今回の発表では，文化や文明の定義を十分吟味しないで発表しました。よく知られているように，日本において，自然に対して学問，芸術，宗教など人間の精神的な働きによってつくり出される云々かんぬんといった意味の文化が，フランスに対する後発国ドイツの独自性を主張すべく，フランスのいわゆる文明概念に対する対抗概念として形成されたクルトゥールの訳語として人口に膾炙するのは 1910 年代後半です。近代デジタルライブラリーという国会図書館のデータベースがありますが，あれだと書名と目次にその単語が引っかかると出てくるのですね。「文化」という言葉を入れると，明治期にはほとんど出てこない。つまり，いわゆる文化というものが一般に普及するのは比較的最近のことだということです。ただ，その以前に，いわゆる中国古典の，文治教化という，刑罰だとか威力を用いない人民の教化みたいな意味，文化・文政の化政文化の文化というのはそれなのですよね。なおかつ，いわゆる文明の圧倒的な影響力ほどには力がありませんでしたけれども，同じく世の中が開け進むことという，そういう意味での文化というのが明治期に用いられた。例えば大槻文彦『言海』，今回の発表に当たって，一応調べてみると，大槻文彦『言海』の文化の定義というのは，「文学教化ノ盛ニ開クルコト」というふうになっています。これは旧来の，在来というか，中国語の文化概念に，今言ったシビリゼーションの訳語としての文化概念を加えたような，ミックスしたような，そういう概念ではないかと思います。要するに，そうした文化，あるいは文明を国家イデオロギーから解放することで学として成立したのが文化人類学ではないかというにわか勉強を，須田先生から本を借りてしたのですが，片柳が使用している文化人類学的な意味での文化に最も近い言葉というのは，実は「風俗」で，これは，「(一)テブリ，人間ニ古ク馴レ行ハレ来リシ事。世ノナラハシ。ナラヒ。(二)俗

ニ，衣服ノヨソホヒ」，そういった解を「言海」では書いています。後者の用例，一つだけ引いておくと，服制改革内勅というのがあって，「朕惟フニ，風俗ナル者移換以テ時ノ宜シキニ随ヒ，国体ナル者不抜　以テ其勢ヲ制ス」と，戦前の日本のナショナルアイデンティティを担保していたのは，文化ではなくて国体，独自性の主張の根拠は国体にあったのだと思うのですね。だから，いわゆる大正期のクルトゥールの訳語としての文化だとか，いわゆる第二次世界大戦後の文化人類学的な文化というものが，戦後，国体で独自性を主張し得なくなったときに一般化していくのではないかという，そういう見通しを一応持っています。ちなみに，『言海』の文明の語義は，「文学，智識，教化，善ク開ケテ，政治甚ダ正シク，風俗最モ善キコト」，いわば，風俗と文化を総合して概念化しています。ただ，この『言海』の文化なり文明の観念というのは，概念というのは，要するに，進化論主義的なというか，価値を含んだものですよね。なおかつ，風俗も，先ほどもお話しましたように，野卑だとか，そういう在来の内と外だとか，彼と我だとか，いろいろなものにくっついてしまっているわけです。それで，要するに，そういうことを考えると，まず，これは西川長夫が詳細に論じているのであれですけれども，そもそもヨーロッパの文化ないし文明も，18世紀の後半に入ってから双生児のように一つの母体から相次いで誕生し，それぞれフランス，ドイツにおいて国家イデオロギーと分かちがたく結びつきながら概念形成されてきた，これにさらに，日本の場合，受容の問題がある，生じる。そうすると，簡単に言うと，文化と文明の語義だとか，世の人が指し示す事象を特定するのは，今の私には難しいと思ったのです，正直言って。そこで，ゲルナーは，要するに，ナショナリズムな文化を恣意的に解釈することによって民族を生み出すというふうに論じているのですけれども，そこの中で，レジュメの最後のほうに出したのだけれども，文化が何をなすのかを探っていくのが最上の道だと，そういうことを書いているのですね。私も，これにならって，学びつつ，日清従軍兵士の文化認識のあり方や文化の機能に着目して，一応今回，４人，それぞれの分野の，代表ではないのですけれども，という形で出てきたので，私なり歴史

研究者としてやれることを考えた末に，こうした発表をしてみた。だから，余り，よい，きちんとしたお答えになっていないけれども，簡単に言うと，文化だとか文明というのを明確に定義することが，少なくとも私には今のところできなくて，おぼろげなのだけれども，そうしたものが何をもたらしたのかということを歴史的に検証してみたいと思った次第です。

なお，私の話だと，世界に文化を学ぶと，つながらないことになってしまうのですが，これは個人的な見解で，アドミッションポリシーとは関係ない。ただ，いわゆる，ある意味，共通性と差異のどちらかに力点を置くかによって多様な文化解釈が可能だと思うし，そして，そういうことを考えると，戦後の日本文化論というのは，一部の文化的な事象を取り上げて，それが今の国家の領域に歴史貫通的に存在していたかのような，そういう文化論が余りにも多過ぎるのだと思うのですね。だから，何か，一つは文化人類学の全体論的視点というのが，一つの，そういうのから抜け出す道なのかな，あるいは，そういった恣意的な解釈を防ぐ手段なのかなということを，にわか勉強の中でおぼろげに思ったりもしたのですが，いずれにしろ，まだ勉強の途中なので，文化学科にいる以上，この問題を少しずつ考えていきたいなと思っています。

○須田氏　文化とは何かといったときに，やっぱり文化という日本語が何を意味するのかという問題と，それから，その文化というのはどういう概念なのかという問題があると思うのですよ。今，日本語の中での文化というのはどういう意味かというのは郡司先生が説明したとおりだと思いますし，そんな古いものではないと思うのです。文化人類学というのは，人間にとって，ホモサピエンスにとっての文化というのは何かということを研究対象にしてきたわけですけれども，それは，今，上野先生と佐藤先生がいみじくもおっしゃったこととほとんど重なります。人間が考えてきたもろもろのことですとか，自然と対立するものとか。当初，今から 100 年くらい前は，文化とは何かということ，文化の定義というのは幾つか出てきたのですけれども，定義づけるために，文化の諸要素を全て挙げていくということが行われていました。タイラーとかはそういうようなやり方をし

たわけです。ところが，その諸要素を挙げていっても，これが欠けている，あれが欠けているとかということになって，結局，その文化の中身とか要素を全部挙げて，文化とはこれであるというような定義というのは，今はあきらめたところです。1960 年から 70 年ぐらいにかけて，ピーコックが，人類学に，あるいは人間における文化とは何かといったときには，認識と行為のための規則の体系であると。その認識と行為のための規則の体系には三つの特徴があって，一つは自明性，当たり前過ぎて，ふだんは意識していない規則だと。それからもう一つは，共有といいますか，共有性といいますか，その規則を相手も持っていないと意味が全く通じなくなる。もう一つは，学習，遺伝ではなくて，生まれた後に身についたものであるというようなこと，人類学では，もうそれで決まっているものですから，授業の文化人類学では，文化の定義というので，その三つの特徴というのを試験の問題に出して，これが書けないとバツにしています。認識と行為のための規則の体系ということで，例として授業で挙げているのは，私はいやしいものですから，いつも食べ物になるのですけれども，何を食べ物と考えるかと。きょうの話も少しかかわっていますけれども，犬は食べ物と考える文化もあれば，そうではない文化もあるし，例えば，日本の文化ではナマコを食べ物だと考えていますけれども，気持ちが悪いというふうに考えるところもあるし。それから，行為ということで言えば，どうやって食べるかということですよね，同じようなものを食べている隣の韓国の場合は，全部，食べる前に混ぜてしまって食べるという，均一化する，いわゆるビビンバですよね。それに対して日本の場合は，おかずと御飯を交互に食べて口の中で味つけをする口内調味になっている，それは食べ方，つまり，行為が違うからだということです。おもしろいのは，日本から韓国に海鮮丼なんていうのが伝わっていくと，韓国ではビビンバの食べ方をしたいのです。海鮮丼をわあっと混ぜて，味を均一化しながら食べようとする，そこにやはり文化の違いが出てくるなんていうようなことを，授業ではかなり言っているのですけれども。こんなところでよろしいですか。

○司会　なかなかおもしろい話が出たかと思うのですが，時間がかなり押

しておりますけれども，フロアのほうで，今までの個別の発表と，それから全体の討論を聞いて，ぜひ質問したいという方がいらっしゃったら挙手願えますでしょうか。あと一人，二人，質問可能だと思いますので。いかがでしょうか。

特にないということなのでしょうか。

一応 5 時までとなっていますから，ちょうどいい時間になったのかもしれませんが，私たちのいる学部は人文学部と言っているわけです。ただ，私たちは，人文学の専門家というのは非常に少ないですよね。つまり，人文学というのは，専門ではないのですよね。学問というのは，18 世紀以降あたりからどんどん細分化しまして，専門化して，人文科学，社会科学，自然科学というふうに，サイエンスになっていったのです。ですから，私たちはそれぞれの，ここにいらっしゃる方，大方がですね，人文科学の専門家なのです。ですから，自分の専門で話をすれば幾らでもいろいろな話ができるのですけれども，きょう，文化ということを共通項として話してみても，やっぱり 4 通りの捉え方があるわけですよね。ですから，私たちはやっぱり個別の，自分の専門分野だけに閉じこもっているのではなくて，時に，こうやってお互いに交流し合っていくという，それぞれ学問が違うということは，それぞれ文化が違うようなところがありまして，言語も違うし，考えていることも違うというですね。「どちらも相手と同じことを考えない」（*οὐδεὶς ἕτερος ἑτέρῳ ταὐτὸ ἐννοεῖ*）という有名な命題があるのですけれども，文化ということでもっても，実は考えているところは 4 人全部違うのだというような状況があるのです。にもかかわらず，やっぱり私たちが人文学部にいて，こういうふうに話が通ずるという，どこか，そこに，普遍人間的な何か共通のものがあって，やはりそこのところを探っていくというのが私たちの学部の特徴だと思います。私は「人文学概論」なる講義をしているものですから，人文学とは何かということを考えてみますと，「人間とその文化を総合的に探究するトータルな学問」だと，私はそう思っています。ですから，部分だけ部分だけ見てですね，木を見て森を見ず的なところで満足しないで，木を見るのだけれども，同時に全体の

森を見るという視点を失わない，これが重要なことで，実はそこが本当に損なわれているのが今の日本の教育なのではないかと思ったりします。そういう意味で，極めて有意義な場になったのではないかと思います。

それでは，最後に，きょう，４名の発題していただいた先生方に拍手をもって終わりたいと思います。（拍手）